

フリーメーソンに関する断片

ミハイル・バクーニン

1865 年

目次

A		3
	現代フリーメイソンのカテキズム	7
B	フリーメイソンのカテキズム	8
	1 神学	8
	2 人間性	9

A

フリーメーソンが再び生きて有用な団体となるためには、もう一度、人類への奉仕を真剣に行わなければならない。しかし、今日、この言葉が意味する「人類に奉仕する」とは何だろうか。罪のない人や弱い人を守ること、病気の人の世話をすること、貧しい人に食事と衣服を与えること、貧しい子供たちに教育を与えることでしょうか。これらの仕事はすべて極めて称賛に値するものであり、人間友愛の原理の実践的な応用として、真のフリーメーソンだけでなく、慈善の感情に無縁でないすべての人の義務の多かれ少なかれ、それぞれの能力に応じて、その一部をなすものである。しかし、もしフリーメーソンがこれらを実践すること以外に目的を持たないのであれば、同じく慈愛の実践以外に目的を持たない無数の宗教団体と何の違いもないだろう。彼ら（フリーメーソン）をこれらすべての宗教団体から引き離す巨大な違いは、一方ではフリーメーソンが、他方ではキリスト教団体が、その教育と援助を分配する精神の違いによって、独自に表現される。後者の絶対的かつ最終的な目的は、人間の苦しみの軽減、宗教的精神の勝利、神のくびきへの人間の服従、ひいては教会と教会によって認可されたすべての現世的権威への服従よりもはるかに神の栄光であり、必然的に人間の理性と意志の低下と放棄、すべての自由の否定、奴隷制である。それとは反対に、フリーメーソンは、その第一の目的に忠実でありたいと願うなら、人間の完全な解放、あらゆる権威の廃墟における自由による人間性の構築を望まなければならない。

宗教は言う。

1. 神は唯一であり、永遠であり、絶対であり、全能であり、異界であり、個である。彼は世界を包含し、彼が創造したこの宇宙の外側と上にいる。彼はすべての光、知恵、愛、美、真理、善、正義である。彼から離れて、世界と人間において、彼の特別な恵みが訪れていない限り、すべては嘘と不義と闇だけである。それは死の王国である。人間は、自分の努力では、決して神のもとに上ることはできない。なぜなら、それ自体では、嘘は真理を直観することもなく、滅びの闇は神の光を直観することもないからである。このように、人間の心に欲望が燃え上がるのは、そのように人間に呼びかけ、神の霊を受けるために自らを清めるように誘う神の恵みの効果として以外にはないのです。もし人間が自分自身で天に昇ることができないのであれば、神はその最高の善性において、この世と人間に降りてきて、彼を啓発し、その恵みによって彼を昇らせ、救われるようにすることができるからである。
2. 世界は自分自身で神を見ることができず、神はこの世界に目に見える形で生息していないため、神はその選民を通してのみ自らを明らかにすることができる。キリスト教は、神の子、父と同じ神、父とは異なるが永遠に父と一体であると主張しているのである。イエス・キリストは、地上に降り、自らを人間とし、十字架の殉教と屈辱を受け、死に、復活して天に昇り、全人類に重くのしかかる神の呪いを背負い、その人類に救済の可能性と開かれた道を残しているのである。
3. 私たちが真理と正義と呼ぶものは、このように神の啓示によってのみ存在するのです。人間の理性は、それ自身に任せておけば、嘘を生み出すだけであり、心や良心は、無秩序と不義を生み出すだけであった。人間にとって、自分の理性、自分の心、自分の良心を信じることほど、致命的なことはない。彼の理性は神の前では狂気であり、彼の自然な正義、彼の心の本能は不敬である。それを信じることは、高慢という悪魔の罪を犯すことであり、地上にも天国にも赦されることのない聖霊に対する罪である。救いの第一歩、人間の精神と心に及ぼす墓の最初の効果は、これでなければならない。その人は、啓示された神学から独立したすべての哲学を放棄し、自分の思想や、自分の自然な良心や心の声をすべて犠牲にし、不信にしなければならない。
4. 選民の継承、預言者、彼らによって設立された祭司が教会を形成している。教会は、神自身によって設立され、神の恩寵を受けた選民によって最初に設立されたので、聖なるものである。教

会は、明らかにされた真理と正義の神の伝統を、そのすべての純粹さにおいて保存し、永続させ、次代の人々のために説明し、発展させるといふ聖なる使命を担っている。教会は、神の霊によって永続的に啓発され、導かれていなければ、その使命を達成することができないのである。したがって、教会を離れては、真理も正義もないのである。

5. 教会が正義と真理の独占的な所有者であるならば、教会はまた、人間社会を分かち合うことなく統治するよう要請され、人間社会を救いの道へと導くことができる。ひとたび人間が金の偉大な栄光のために自分の理性と良心を犠牲にしたならば、自分の意志も聖なる教会の足元に置かなければならない。人間の理性と良心の犠牲は、必然的に神の隷属、教会による人間の絶対的な統治につながる。そして、真面目で誠実な神の宗教はすべて神権政治につながるに違いない。最も幸福で、最も特権的で、特に神によって祝福される国家は、パラグアイやローマのように、神の選民である司祭たちによって直ちに直接統治されている国家である。特権の少ない民族は、世俗の王子たちによって統治される。皇帝、王、公爵は、教会の仲介によって、しかし教会の仲介によってのみ、塗油された主の使者であり、この権利によって強くなり、順番に軍事および民事当局、看守や死刑執行人に至るまで、統治、管理、審判、王国、地方、都市、町、そして司祭を除くすべての個人への報酬と罰を定めるために設置する。この意味においてのみ、すべての権威は神から来るものであり、いかなる現世的権威に対する反乱も、神に対する罪である。諸侯および諸侯によって確立された権威は、教会によって確立され、公認されているからこそ、正当で神聖なのであり、彼ら自身が教会に服従しているからこそ、正当である。
6. しかし、王子たちは、致命的な嫉妬と犯罪的な野心に触発されて、教会という神の軛を振り払おうとし、反乱に次ぐ反乱で、結局、自分たちが主の油注がれたと宣言し、教会から独立して、自らの意志と恵みによって支配してきた。「ルイ 14 世の絶対王政は、ローマ・カトリックの絶対王政を条件としていたのである。ローマから解放されたいという願いは、ルイ 14 世とその後継者たちにとって、現実には、自分たちの原理を剥奪し、自分たちの基盤を破壊することだったのです。もし私が信者であるなら、絶対的な権力に服従することを心から望む。ただし、この権力は私の信念に由来するものであり、第二を揺るがすことなく第一に異議を唱えることはできないことを示されることが条件である。カトリシズムの神秘に包まれた王権は、それ自体が信仰の対象となる。私は四方を包囲され、王と司祭、司祭と王を覆う権威の前に跪く。しかし、もしその君主制が絶対的でありながら、その原理によって自らを制限することをしないなら、もしその天才的な才能によって自らを聖域から切り離し、自らにのみ支えられる公共の広場に降り立つなら、その誇りはその破滅となる。なぜなら、私はその孤立と裸に驚くからだ。そのすべての襲は、それが自らの道に掘った空洞を測定することから私を妨げないだろう。最も絶対的な支配力を持つために、それを支える権威を拒絶したのである。」

フランスに当てはまることは、他のすべての国にも当てはまる。王は、教会（教会の神聖さは認めているが）に反旗を翻すことで、自分たちに対する国民の反乱を準備し、ある意味で正当化した。国王たちは、教会と神の法に対する国民の反乱を準備し、ある意味で正当化したのである。

7. 王よりも論理的な人民は、君主的権力に反旗を翻し、同時に教会という神聖な政府を転覆させた。これは、何世紀にもわたり温和な軛の下におかれてきた自然人の、神の法に対する反乱であり、神の真実と正義に対する人間のあらゆる情念の爆発である。それは、神の啓示の神秘に対して、人間的で邪悪な哲学に対抗しようとする精神の反乱である。最後に、自由といわゆる自然権という不敬な口実のもとに、神の権威によって設立され聖別された制度にあえて破壊的な手を加える人間の意志の反乱である。神は、人間社会に、理性と自由の助言に従うだけで、自らの工夫に任せれば、不幸と無秩序をもたらすだけであり、償いと試練のこの地上では不可能な幸福を達成することができず、永遠の破滅を招くことを最終的に納得させるために、この悪名高い愚行と犯罪を許し、今も耐えている。
8. しかし同時に、神はその最高の善性において、罪人に死を望まず、救いを求め、聖なる教会の声を通して彼らに警告し、促し、より最近では最高位の教皇の声を通して、聖なるアナテーマ（※ 呪い・破門など）を投げかけている。

- 人間の理性は真理を受け入れ、到達し、理解する能力があり、啓示の理解できない神秘の前に絶対的で盲目的な信仰でひれ伏してはならないと主張する者たちに対してである。
- 人間の良心が正義を生み出すことができると主張する人々に対して、また、人間の心と良心が生み出す自然の道徳律が、天の神秘的な戒めの前で軽蔑され、放棄され、壊されてはならないと主張する人々に対して、アナテーマを。
- 人間のいわゆる高貴な情念をあえて奨励し、人間の自然な本能と靈感に従って、肉によれば美しく、高貴で、寛大であるものが、神によれば必ず下劣で、不敬で、卑しいものであることを受け入れようとしなない人々に対して、アナテーマを。また、逆に神の理によれば聖なる、正しい、美しいものが、恵みによって啓発されていない人間には必ず嫌悪、嫌悪、不当に見えるはずだということに対しても。人間は肉の自然な情緒、人間の名誉、いわゆる人間の尊厳は神の前では恐ろしい侮辱に過ぎない、友情、父、兄弟、夫と息子の愛、祖国への愛、さらには人間への愛を、神の至高の愛に犠牲にしてはならないと主張する人々に対して、アナテーマはある。
- 衛生と運動によって身体の強さ、健康、美しさを、思考によって心を、教育によって意志と個人の尊厳を、相互の人間尊重の模範と進歩的な自由によって、子どもの自然な気質を育てることから子どもの教育が成り立つと主張する人々に対して、異論を唱える。聖書が私たちに明らかにしているように、労働は、罰、劣化、奴隷のしるし、神の呪いのしるしであるどころか、すべての人間にとって神聖な義務であり、力と尊厳のしるしであり、権利と自由のまさに基礎であることを子供たちに教える人々に対して、異端を唱えなければならない。名誉と個人の尊厳に満ち、他人の権利と尊厳を尊重し、自分の自由を誇り、正義と平等を愛し、人生のあらゆる事柄とあらゆる状況において、不敬な人間性の崇拜を公言する、強い人間を形成する目的で子供たちに教育を与える者たち、そして同じ目的のために宗教教育を放棄し拒絶する者たちに対して、忌み嫌う、聖性。悪魔的なプライドで自らを眩惑し、真理、正義、人間の自然な力と能力の発達における目標を求めながら、この聖なる真理を知らないまま、あるいは拒絶する人々に対して、アナテーマはある。すなわち、子供の教育の唯一の目的は、子供の中の人間の力、美、理性、意志、正義、名誉、尊厳、尊敬、愛を伸ばすことではなく、逆に殺すこと、つまり、天からのインスピレーションに耳を貸すための空間を作るため、自由人ではなく、神の奴隷とするためのものである。そして、神の真理の唯一の所有者である教会が、宗教的な教育を与えることができるのである。
- この地上が、神ご自身の意志により、罰、罪滅ぼし、浄化、試練、不幸の場でないかのように、この地上での幸福と幸福を目指す現代社会の悪しき傾向を助長する人々に対して、アナテーマ。苦しむ者は幸せである。飢え渴く者は幸せである。
- 貧乏人がいなくなることを望む者は忌み嫌われ、そうなれば慈善の場なくなるからである。自由、平等、正義、友愛、つまり地上の楽園を求める人々には、アナテーマがある。
- 自由主義者、民主主義者、社会主義者、革命家、人道主義哲学者、神の権利と王侯の現世的権威を冒瀆する者たちに対して、アナテーマを。すべての権威は神に由来すること、神とその教会は結果として暴君の唯一の審判者であること、そして確立された暴君的権力に対する臣民に許された唯一の抗議は、地上における神の意志の唯一の代表である教会の神聖かつ最高の管轄権への訴えであることを忘れて、最も残酷で最も悪質な暴君に対しても反逆を説くすべての人々に対してアナテーマがある。
- したがって、王子、大臣、あるいは単なる臣下であっても、王の時間的権力が教会から独立しうる、また独立すべきであると主張しようとするすべての人々に対する最後のアナテーマであり、全人類の救済への唯一の道である教会には、宗教のみならず政治や社会といった人間の問題を管理し指示する権利と使命がなく、王子とそのすべての臣下を最高権力者として支配することができないとするものである。

- ・ 結局のところ、宗教は、主権者である教皇が世に送り出した回勅が、神自身の靈感を受けて、すべてのカトリック信者とプロテスタント信者に聖なる熱意を持って受け入れられていることを教えてくれる。その目的は、警告し、戒め、断崖絶壁の端で不敬者を止め、同時に信仰者を安心させ慰めるという二点である。それは時代のしるしであり、その時は遠くない-神の正義の時-神ご自身がその全能の手で反乱を断ち切り、迷走する人間社会を、唯一の論理的、実質的、ひいては唯一の真の神の教会である使徒的ローマ教会の最高権威下に引き戻す時なのだ、ということである。そうすれば、人間は、考えること、威厳を持つこと、自由であること、人間であることをやめて、再び奴隷か羊になる。つまり、聖典にしたがって、世界にはただ一人の羊飼いとただ一匹の群れが存在することになる。

それが純粋なカトリックの教えである。このようなことは、カトリック、プロテスタント、モハメッド、ユダヤ、あるいは異教徒にかかわらず、すべての宗教の教義の厳密な帰結である。キリスト教はまさに絶対的な宗教である。それは、神性の利益のために人類を組織的に貧しくし、破壊し、奴隷化するという、すべての宗教の基本原則、本質、そして、あらゆる宗教の最高原理だけでなく、その対象として別世界の人格神、実在神を想定している形而上学も、その最高原理に言及しており、パンテ主義の非人格神は思考の想像上の幻影に過ぎない。私は、神道だけでなく三位一体論も、いわゆる合理的神学の唯一神をいったん受け入れてしまえば、人類の退化が必然的に宣言されねばならないと言う。神はすべてであり、人間は無である。神はすべてであり、人間は何もない。神は真理、正義、永遠の生命であり、人間は嘘、不義、死である。真理と正義は自分に内在するものではなく、神の選民の仲介によって高みからの啓示として受けなければならぬ。彼らは、自分の指導者、医師、永遠の命のための主人であり、必然的にこの地上において自分を支配し命令する使命を受ける。だから、彼は彼らに信仰と絶対的な服従を負っているのである。つまり、神の存在は、人間の理性、良心、意志の放棄、自由の否定、奴隷制を必然的に意味するのである。このことは、地球上に存在するすべての宗教の中で、キリスト教だけが理解し、キリスト教の宗派の中でローマ・カトリックだけが厳格な結果をもって宣言し実現したことである。キリスト教が絶対的な宗教であり、使徒教会とローマ教会が真剣で正当で神聖な唯一の教会である理由は、この点にある。

だから、私たちのすべての半哲学者、すべての半思想家に謝罪し、宇宙の偉大な建築家を呼び、教会と新しい礼拝形式を形成しようとし、神のアイデアと人間の自由を調和させることができると信じるフリーメイソンの兄弟に謝罪する。この致命的に厳密で論理的なアルファベットでは、このAを言う人は、絶対にZに到達しなければならないのである。「神は存在する、だから人間は奴隷である。」「人間は自由である、だから神は存在しない。」私は、この輪から抜け出すことに挑戦する。そして今、私たちは選択しよう。

「図版の項目の翻訳」

メーソンのシンボル

理性

自由平等連帯

正義

理性 - 労働 - 正義 - 自由 - 平等 - 連帯

神学のシンボル

啓示

特権利己主義

奴隷制度

恩寵

黙示録 - 慈愛 - 恩寵 - 権威 - 特権 - 利己主義

理性 - 啓示

労働 - 慈愛

正義 - 恩寵

自由 - 奴隷
平等 - 特権
連帯 - 専制君主制

現代フリーメーソンのカテキズム

すべての神学を廃止する

フリーメーソンは次のように考えている。

1. 万物の創造主であり最高主である、人格的で別世界の神の存在は、人間の理性と自由と相容れないこと。
2. 汎神論的で非人格的な神、被造物から切り離せない、そのために永遠に見える神、多かれ少なかれ世界に分散している神の考えは、形而上学的な作り話であり、実際の実用的意義はなく、その精神と同様に、形式においても矛盾し混乱している、そして、この非人格的な神を肯定することによって、明瞭で正確で明確なもの、良心を啓発するもの、人間社会の基礎となりうるものをまったく肯定していないことになる。この神は、全世界を所有しているが、自分自身は所有しておらず、その結果、神ではない、この創造主は、まったく創造主ではなく、盲目的で不可抗力であり、個人の意志によって指示されるのではなく、必要性以外の何ものでもない。本能が予見することもあるが、理性だけが認識できる自然の条件と不変・無敵の法則の前に私たちを曲げながら、それが絶対的に私たちの存在のすべてを取り囲み、貫き、支配することを止めないにもかかわらず、私たちの理性が認識する限りにおいてのみ法則として存在するのだという。なぜなら、神格化することによって、それらを変性させ、その現実性と力を確立する唯一のものである理性的な性格を奪ってしまうからである。理性と意志によってそれらに服従する一方で、我々はそれらを神格化したり、偶像化したりすることはできない。
3. すべての存在は、それ自身の性質またはその本質によって決定され、絶対的に制限されており、存在またはそれ自体であることをやめることなく逃れることができないので、結果として、何かの単純な存在を理解し、把握し、あるいは注意することができるが、それはその何かが部分的にそれ自身に不可欠であるか、またはそれがそれに固有で内在している場合に限られることを考慮すると、したがって、私の能力の一つが神の存在を私に明らかにすることができるためには、神が理想的には私自身の一部であることが必要である。もし別世界の人間離れた神が存在するとしても、それは私の存在の条件において、私の人間性と完全に同一で適合する限りにおいてのみ、私に姿を現すことができる。
4. その結果、フェティシズムの残忍な空想からキリスト教の三位一体論に至るまで、すべてのカルト、すべての宗教、すべての古今の神々は、人類の発展における多くの偉大な歴史的瞬間を示す、人間の創造物にすぎないと結論づける。

人間は、その寛大な謙虚さゆえに、歴史の始まりから現代に至るまで、何世紀にもわたって、自分の幸せ、自分の尊厳、自分の自由を損なってまで、天を創造し豊かにするために、巢をほどこき、地を荒廃させることを喜んできたのである。

地上のものを天から取り戻し、神、つまり人間の理想を人間自身に戻させることで、現代のフリーメーソンは、宇宙の偉大な建築家の崇拜を、人間の崇拜に置き換えている。

2) 人間性の原理とカルト性

[断片の終わり]

B フリーメーソンのカテキズム

1 神学

人間にとっておそらく解決不可能な、絶対的な存在と、別世界の、人間以外の神の存在または非存在という超越的な問題はひとまず置いておこう。

同時に、人間は、真理と正義を、自分の行為の原理的調整装置とし、自分の存在の外、自分の理性と良心の外に置くと同時に、その瞬間、自分自身を正義と真理ができないと宣言し、啓示の必要性を仮定し、その結果、教会と国家という形で、自分の理性と良心と自由に反する軛に服する絶対権力者の必要性を仮定することを考慮に入れている。教会と国家は、狂信的な幻想の効果によって、あるいは悪巧みによって、全世界に知られていないこの神の名において、発言し、行動し、仲間に命令する使命と不敬な権利を自らに傲慢する人間によって、必然的に代表されるのである。この法外で不敬な特権は、まさに物事の力によって遺伝するものであり、必然的に、そしてすべての歴史が証明しているように、人間社会に、神の恵みによって特権を与えられ、独占的に統治されるカーストと階級の階層を生み出さなかったことは一度もないこと。すべての排他主義と特権は、人類に内在する基本的な法則の効果によって、知的・道徳的な貧困化、昏迷、疲弊、腐敗の確実な原因である。これらの階級とカーストは、特権の効果そのものによって劣化する際に、自分たち個人の利益をすべての人の利益に置き換えることを決して怠らなかつた、彼らの利己主義と貪欲さの恣意性を、永遠の正義の法則に置き換え、一言で言えば、自分たちの利益のために彼らの稼ぎの財を搾取し、民衆を地上での不幸と奴隷の生活に追いやり、彼らの唯一の慰めとして、墓場の向こうでの幸福という誤った約束を残している。

すべての存在は、それ自身の性質によって決定され、その結果制限されるので、存在しなくなることなく、あるいは同じことになるが、それ自体でなくなることなく、そこから逃れることはできない。したがって、超自然的、超人的、異世界的な至高の存在の存在を仮定しても、人間はそれを人間的に認識するだけであり、それ自体としてではなく、人間を破壊することなく、人間の中に反映し顕在化できるものとしてののみ、つまり、人間の条件や形態そのものにおいてのみ認識することになる、フェティシズムの残忍な神々からキリスト教の三位一体論、さらには合理主義哲学の唯一神に至るまで、神と神々の歴史的啓示は、人間そのもの、人間に内在する真実と正義の連続的顕現に他ならなかつたが、歴史的に必要な幻想によって彼はまず自分の外に架空の天国を運び、それらを自分にとって異物、主人のように崇拜し、それによって自分を人間の本質とその自由の源そのものを奴隷としたのだった。

すべての歴史的進歩は、まず第一に、人間による神々の連続的な創造、天における人間の本来の本質と永遠の基盤の発展と説明にあり、それによって人間は、まるで鏡のように、自分自身の真実、自分自身の正義、自分の全運命をそこに観想することができるのだと考えている。そして、天から地上のものを取り返し、人間が自ら創造したものを人間に与え、神、真理、正義を人間の中に帰らせることで、最終的に人間を自分の運命の支配者とし、成人とし、自由とし、地上での使命を果たすことができることを宣言するのである。

このようにして、正義、真理、歴史的宗教において神と呼ばれてきたすべてのものが、人間の中に内在していること、すなわち、それが人間の本来の本質であること、その結果、それを認識するためには、啓示を必要とせず、それらを達成するためには、外部の超自然的援助を必要としないこと、自分自身にのみ頼ることによって、それらの説明とそれを実現する力の両方を必然的に見出すことになると思う。

それどころか、知的・道徳的光学の宿命的な法則によって、私たちがそれらを自分の外側、高みに求めてきた限り、私たちは天で崇拜するすべてのものの逆転を地上に得たに過ぎないのだ。真理、

正義、自由、そして神を天国に運ぶことによって、私たちは必然的に、そして絶えず、地上を嘘、不義、奴隷、そして悪魔に引き渡してきた。

そこで、私たちは、超自然的で別世界の神の存在の有無に関する哲学的な議論に入ることなく、少なくとも実質的に無意味であると考え、その問題を各人の良心に委ねることにして、次のことを確認する。

1. 地球上で、人間社会で、歴史の世界で、我々が神や神の啓示と呼んできたものはすべて、人類の普遍的な天才の創造、発展、一連の連続的な顕現にほかならないこと。
2. もし別世界の神が存在するとしても、人間はその神を見たことがなく、その声を聞くこともできず、その結果、その考えを表現することも、その意志を現すこともできないこと。歴史上の偉人、立法者、預言者、思想家、詩人たちは、人間の奥底からしかインスピレーションを得ることができなかったということ。
3. 人間は、神の名において仲間に語りかけ、命令する可能性も権利も、過去にも、現在にも、将来にも、持ち得ないということ。
4. 集団的、個人的存在としての人間の全任務は、人間の外部にあり、高所からの超人的、超自然的啓示によってもたらされる思考、意志、法則ではなく、人間自身の本性に根ざし、内在する法則を理解し、実現することにあること。
5. その結果、人間の問題に神の観念が積極的に介入することは、道徳や社会の秩序を構成する必要条件であるどころか、それどころか、論理と歴史の両方が我々に示すように、両者にとって障害であり絶対的な破滅であり、過去のように、地上における嘘、不義、無秩序の奴隷制における確実な源泉となるであろう。

私たちは、神と人間のあらゆる啓示とあらゆる権威を否定し、断言する。人間の理性（集団的および個人的）が真理の唯一の基準であり、人間の良心が正義の基礎であり、個人および集団の自由が人類における秩序の源であり唯一の基礎であることを、我々は断言する。

[原文ではセクションが消されている]

2 人間性

1. 神性の崇拝と奉仕を宗教に放棄することによって、フリーメーソンは、もっぱら人間性の奉仕と崇拝に専念する。
2. フリーメーソンは、それらを崇めつつも、自然や人間性を神格化しない。

A 私たちが自然と呼ぶものは、現存するすべての生きとし生けるものの総体であり、その総体には孤立したものはなく、連帯が基本的かつ至高の法則である。生きているもの、存在するもの、大きなもの、小さなもの、最も単純なもの、最も複雑なもの、最も遠いもの、最も近いもの、全ての力、最も小さな原子、は、直接または伝達によって、そして最も多くの場合、知覚できない方法で、絶え間ない相互影響と依存を行使し、苦しんでいる。各点に対する全体、全体に対する各点の永遠の作用と反応は、同時に常に生産者と製品である世界の全体性の生命、調和、共通かつ最高の法則を構成する。常に創造的で活動的なこの普遍的な連帯は、私たちの地上惑星を形成し、地質学的、気候学的な関係において、それぞれの部分に存在条件と異なる人相を与えてきた。植物と動物の生命を与え、誕生させたのも、その連帯感なのである。

無政府主義図書館 (Japanese)

ミハイル・バクーニン
フリーメイソンに関する断片
1865年

https://note.com/ia_wake/n/n68076a61bc41 (2023年10月28日検索)

ja.theanarchistlibrary.org